

## 第 58 回シェイクスピア学会

### セミナー 2： シェイクスピアと同時代（前後）の宗教と視覚文化

「書籍印刷なくして宗教改革なし」と言われるが、特に絵画や木版画を使って一般民衆に教えを分かりやすく伝えることは時代の急務であった。本セミナーでは、ヨーロッパ中世社会から絶対主義的な主権国家に移行する過渡期において宗教改革が果たした社会的役割を念頭におきながら、初期近代英文学・演劇における宗教と視覚文化の関係を考察した。

ルネサンスにおいて、自然哲学の分野では視覚的観察に重点がおかれる一方、精神的な事柄に関して宗教改革は視覚イメージの価値に対して問題を投げかけ続けたが、1580 年頃には初期の iconoclasm 運動から転じて iconophobia の精神風土が定着しつつあったという Patrick Collinson のテーゼに、各セミナー・メンバーがそれぞれどのように対峙するかということが焦点となった。

宗教に関連する視覚文化や表象だけでなく、視覚芸術と極めて親和性の高い詩や劇を比較考察することにより、この神学的、認識論的、美意識的変革期において、初期近代英国の様々な芸術文化媒体が、様々な次元で新旧イデオロギー対立の緊張を孕みながらも、ある意味パリンプセスト的な重層的視空間や視覚経験を提供しようとしていたことを、本セミナーでは明らかにすることができた。

議論の対象としては、マグダラのマリア受容と娼婦表象（松田）、祈祷書のパラテキスト（井出）、ラザロと『夏の夜の夢』（郷）、ヨナとペリクリーズ（山本）を主要な射程とし、多様なテキストやパラテキストの関係性が、テキストだけでなく図像やモノの間をも縦横無尽に横断しながら論じられた。本セミナーは、各発表者の直後に他のパネラーが随時質問する形式で進められ、最後にフロアーに開いた形で活発な質疑応答を行った。



当日の発表主旨は以下のとおりである。（発表順）

松田美作子氏：「Reformation 前後の宗教文化—マグダラのマリアとエリザベス表象を巡って」

エリザベスが即位前に訳したマルグリット・ド・ナヴァールの *The Mirror of One's (Spiritual) Self* (1544) を起点に、女性表象から宗教改革の特質を掘り下げた。具体的には、John Bale が題名を変更して出版した *A Godly Meditation of the Christian Soul* (1548)、Jamus Cancellar, Thomas Bentley が用いたエリザベスの肖像画やペイルが付した注釈からマグダラのマリア受容を考察した。さらにカトリック文学の例としてイエズス会士 Robert Southwell の *Mary Magdalenes Funeral Tears* を取り上げ、新旧両派の図像利用について考察を深めた。

井出 新氏：「イングランド国教会と視覚文化—『キリスト者の祈禱と黙想』の出版を中心に」

1569年にロンドンの書籍商ジョン・デイによって刊行された『キリスト教の祈禱と黙想』(*Christian Prayers and Meditations*)は非常に特異な祈禱書である。本来、エリザベス一世の個人的祈禱書として出版され、冒頭に祈りを捧げるエリザベスの姿を象った木版肖像画が挿入されているため、「エリザベス女王の祈禱書」としても知られている。その後、ジョン・デイの息子リチャードがそれを改訂し、『キリスト者の祈禱書』(*A Booke of Christian Prayers*)として1578年、1581年、1590年にそれぞれ刊行、最終版は1608年に書籍商組合によって出版されている。プロテスタントの祈禱書であるにもかかわらず、カトリックの伝統的な時禱書に基づいて、全ページに施された欄外装飾のパラテキストはプロテスタンティズムが視覚的イメージを忌避してきたことを考えると、国教会の目指してきた方向性とは真逆であるように思える。本発表では、この本を通して、当時の宗教と視覚文化の関係性を再考した。

郷 健治氏：「ラザロと『夏の夜の夢』」

『夏の夜の夢』の宗教的な意味を読み解くために、この劇全体にちりばめられた舞台図像(ステージタブロー)の重要性に注目した。シェイクスピアがその劇作品の中で繰り返し言及した「ラザロと金持ちの寓話」(ルカ16章)は当時のイングランド国教会『欽定説教集』第1巻の「死への恐れを戒める説教」の中でも繰り返し言及されていたが、この寓話を題材にしたランスロット・アンドリュースの宮廷での説教、そして、『夏の夜の夢』の一連の舞台図像(飽食の金持ちとその食卓のおこぼれにもあずかれない貧者、犬と貧者、天国のような妖精たちの世界、妖精の女王の胸に抱かれるボトムの至福など)との関連性を考察し、この喜劇の新たな解釈を提起した。

山本真司氏：「イコノフォビアとペリクリーズの目：ポスト・リフォーメーション英国における視覚経験の再構築」

『ペリクリーズ』の執筆前後の偶像崇拜に対する社会の反応を当時の文化的遺物や文学作品等から確認したうえで、旧約聖書のヨナの主題が当時のさまざまな視覚文化のなかで、どのように取り扱われていたかについて、バンケット・トレンチャーと呼ばれる特別なデザート用絵文字付き木皿の例を中心に考察した。イコノフォビア、あるいは偶像恐怖症といわれる傾向が当時の社会に広がっていたとする時、そのようなメンタリティが、公衆劇場や巡業先で演じられ好評を博したといわれる『ペリクリーズ』という作品に、視覚経験の再構築という新しい視点を与えることになったことについて論じた。